

発行日 \*\*\* 2008年6月20日

e-mail: akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

編集発行人 下村嘉明

発行所

著物から服を仕立てます



☆着物から服へ・リフォームオーダー☆

☆ポイントカードを初めて作りました☆

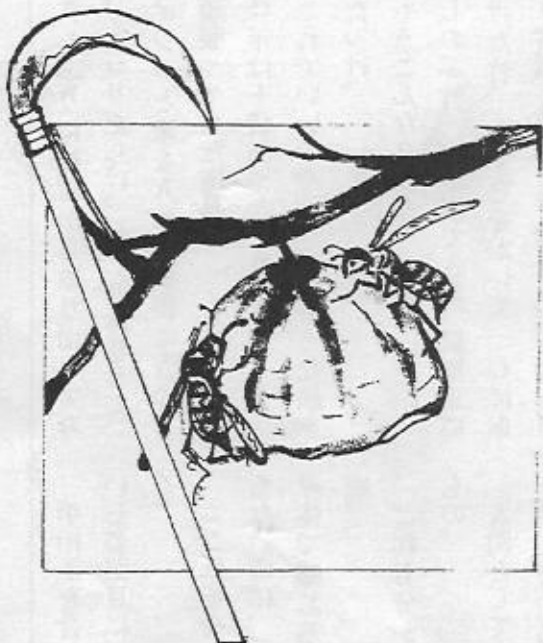
高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870



芥川の写真屋さん

## 杉山は 僕のふるさと 夏の雲



幾度も杉の苗を背負って山に植えに行った。苗木を雑木林の中に植え、大きく育てるには大変な労力を要する。漆の木やケヤキなどに絡みついたアケビ等の葛が生い茂る雑木の林を、ナタやノコギリを使って切り開き、トンガで穴を掘り、苗を植える。大変なのは下刈りの世話である。周囲の雑草や雑木は生長が早く強いので、直ぐに苗木を覆いかぶさるように生い茂る。そうなる前に、下刈りをして苗木を助けてやらねばならない。

人の背丈ぐらいになっても、年に1回は下刈りをして杉の木に巻きついた葛のつるを切り落とす。それでも杉はヒノキ等に比べ成長が早く、山はどんどん杉山になっていった。

下刈りに行く夏。父が早朝からカマを砥ぐ。長い柄の付いた大きなカマの刃を砥石で研ぐには熟練を要する。粗い砥石から始めて細かい目の石で仕上げる。何本目かのカマを砥ぎながら父が「今日はどうする」と聞く。私が「行くで」というと、私の分のカマを取り出してきて砥ぎだした。

山の急な斜面で作業をするなか、毎回出くわすのが蜂である。カマがアシナガ蜂などの巣が下がっている雑木に触れ、顔をめがけて刺しに来るのである。カマを放り投げて「ハチや、ハチや」と言いながら逃げた事も笑い話だ。

そんな苦勞をして育てた杉が売れなくなって久しい。山は売れない杉ばかりで伐採時期を過ぎても放棄されたまま誰も山に行かなくなった。杉の山は地面に日が当たらず雑木が生えないので、山肌の土が侵食されやすく大雨や台風等によって倒木となり災害を起こしやすくする。雑木のクルミやシイなどの広葉樹林は動物達の食べ物も多く実らせるから、イノシシや熊も人里まで来なくても生きていけるが、杉の山ではそうはいかない。花粉症の被害も大きい。

日本中の山を杉林にするような事を私たちは長年してきたが、こんな事になるのなら雑木林のままにして置けばよかった。杉の山を雑木林に帰さねばならないと思う。

## 芥川商店街歳時記

7月5日～13日

中元大売出し

13日・青空ライブ計画

7月26日

夜市

焼きそば・スマートボウルなど恒例の楽しい店がいっぱい

7月30日

絞り染め講習会(無料)11時～五時まで

商店街空き地

わがふるさととは今

私の母校は兵庫県の山間部にある。その母校が、過疎化による生徒数の減少で閉校になったのはもう三十年にはなるだろうと思う。

校門前に安置されていた二宮金次郎さんも何処へゆかれたのやら。見るからに淋しい気がして思い出もとんでしまう。

クラス会も八十路を迎えればいろんな意味で無理。いつも号令をかけて、世話役を一手に引き受けていたのに、やむなく流会となり、長年故郷で頑張ってきた皆さんにお礼を言う機会もあるだろう。と、そんな思いにかられる毎日である。そして、「誰か故郷を思わざる」の歌詞を口ずさんでみる。

やはり年のせいかな身のまわりが淋しくなったのが、何んとも言い難い。

斗ます・しのぶ竹

これも思い出の一品。一升ますで十杯入れて満杯。百姓家にとつは貴重な道具。

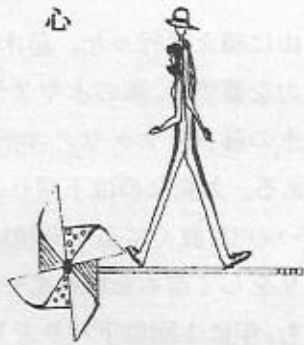
久しぶりに納屋から取り出してみる。ホコリだらけ、ねじり鉢巻して、ヨイショと米を入れて紙袋にうつして頑張ってきた道具。

今年も十袋あった。豊作や。これでいいのや、と嬉しそうな顔をしたっけ。

もうこんな日はやって来ない。しのぶ竹一本が出てきた。紙風車につけた竹。あぐらをかいて一心に赤紙・青紙・黄紙と手際よく、しのぶ竹につけて、口でプーと吹いて。

運動会用の風車づくり、風車をもつて走っている子供。現在、よきお父さん、お母さんとなっている。

こんな時代もあったのだとアルバムに見入ってしまう。



心

民謡、踊りというのは不思議なもので会場にメロディーが流れると、その場の人達が自然と一つになり、何処からとも無く歌声が聞こえてきたり……

手拍子を合わせて、身体まで動かしている姿が目につき、楽しいひとときである。

「これをやらねばだめ」というものでもないのに、互いに寄りかかっていって身体で感じる安心感。心をつなぐ一体感。

どれも分かるものでなくても感じるもの。

人間として大切なのは、一生懸命に取り組んでいる姿に思いを受け止め感じることではないだろうか。

そのためには、私自信が相手に寄りかかっていく弱さ、相手をどんなにか頼りにしていたかを今しみじみ自覚し、人という字は互いに支え合い寄りかかって人という字になっていることを素直に受け止めている昨今。

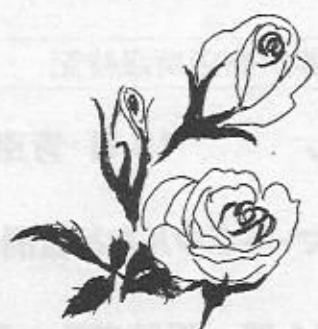
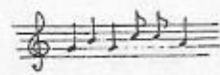
気になる言葉づかい

「うちの娘が、こんなこというてはねん」という表現がよく聞かれる。

聞いている私は、どう返事していいのかわからない時がある。今は亡きばあさんが、よくつかっていた言葉が「あの家のこせがれはワルや、ほんまに」。「自分のこどもはどうなの」と反発したいことが何回もあった。でも、今は、戸惑うような言葉に振り回されてしまっている。

あいまいな言葉づかいは時代と共に変化するが、近い将来、私たちが老人には、大奥さん、と言われる言葉が流れてくるかも知れない、と私の心の中では期待しているのだが、実現は不可能だろうなあ。

年齢を重ねるといことは、今身をもつてひしひしと感じる。戦中、そして戦後と生きぬいてきた身体。少々のことで、泣きわめかないぞという自負があったけれど、現実がそれを許さない。



俳句

養女

- 塩焼きの鮎に青笹こころ馳せ
- 手を触れて染まりそうな初夏緑
- 一夜あけ儚き夢の月見草

品

- 阿武山や梅雨の晴間のほととぎす
- 石垣にピンク一輪五月晴れ



## 父の急死



陛下の玉音放送で日本の敗戦を知らされた国内の状況は、皆それぞれに言葉にならない沈痛の面もちというのでしょうか、いっぺんに笑いがなくなつた感じがしました。勝つと信じて疑わなかつた私たちだれもが、敗戦という事実を前に万感胸に迫つていたので、自然に涙がにじみ出てくるようでした。

何か言うことがはばかれるような感じで、ただうつつむいて黙々とすべきことをするという風でした。私も父も交わす言葉がありませんでした。

私の家は男兄弟がありませんので、出征している家族はおりませんでした。が、周りの家では大抵出征している人がいます。すでに戦死している人、生死も行方もわからない人、いろいろですから、胸の内はそれぞれ違います。重苦しい雰囲気の中で、言葉が出ない無口な日々が経つてゆきました。

やがて学童疎開していた妹が東京の家にもどります。そして母と姉と妹の三人が長野へ来て、私たちと共同生活をするようになったのです。いっぺんに四人増えてしまいました。お陰で私の仕事が増えました。食事の世話から

掃除、私の仕事は日常の家事全般にわたりますから、けっこうたいへんです。母にはできそうもない仕事をするように心がけました。私は不平を言わず黙つて動くばかりです。

疎開していた妹は、病気になる一歩手前と思えるくらい、すっかりやせ衰えていました。身体にはシラミがいっぱい巣くつていたので、お湯を沸かして衣類のシラミを落とし、身体中の衛生掃除をしました。眼を覆いたくなるほどのたくさんの荷物を、やせ細つた身体でよくまあ無事にここまで運んだものだと思います。整理しました。食事のときは、細くしなびた妹にいっぺんに食べないように注意して、皆で少しずついただいたものです。粗末な食事でも、妹がだんだん元気になってゆく姿を見て、涙とともに嬉しさが込みあげてきました。

ある日、「二〇・一一・チチシス・オザキ」という電報が届きました。大阪のお父さんが亡くなったのです。病気という連絡もありませんでしたので、突然の事です。私は大阪へゆかねばなりません。私がいなくなれば、母に負担がかかります。それが気がかりでしたが、行かないわけにはいきません。大阪の家は女手がないのです。「お母さん、よろしくお願いね」とさつそく大阪へゆく用意をしました。

私は長野から大阪への一人旅がとても不安でした。長野から大阪へゆく方法がわからない。一人で行ったことがない。でも、そんなことで戸惑つてばかりもいられません。覚悟を決めて出かける仕度をしました。あるときはたいへん心細い思いをしました。駅へ行つて切符を求め、一番簡単な方法を教えてもらい、大阪を目指しました。

ほんとうにあの時は怖かった。名古屋の駅周辺は爆撃で破壊されて悲惨でした。なるべくまわりを見ないようにして、京都を通り過し、大阪へ到着しました。それから無我夢中で茨木のお寺にたどり着いたので、

家には私の知らない方がいて、平然と居住しているふうに見えます。私はびっくりしてしまいました。水が飲みたいと思つて井戸端に出てゆくと、「あなた誰？」と問い直しました。びっくり仰天とはあのことです。

それからよく話を聞いてみると、母や家の者は皆高槻のお寺の方へ行つて留守との事。その方は父の知人で、戦災にあわれてお寺に避難して来られ、「そのままお寺にお世話になることになりました」というのです。ご親戚の方々は、高槻に行つていらつしやるけど、五所帯ほどが今お寺さんに同居しています」といふ。私は何も知らな

つたので、びっくりしたわけです。

ともあれ、はやく母にお会いして様子を聞かなくてはと思ひ、高槻のお寺へ行くことにしました。電車と徒歩で一時間半ほどかかって、枚方の大橋のたもとにあるお寺に着きました。墓地に人がたくさんいらつしやつたので、そこへ行くと、やつと母に会うことができました。母の顔を見たとき、やれやれと思うと同時にどつと涙があふれ出たのです。「よく長野からかけつけてくれました」と母はとても喜んで下さいました。

墓地の横手に火葬場があつて、一晩かけて火葬にします。私の着いた時には、すでに骨拾いをしてお墓へ納め終わり、お勤めも済んだところでした。

「これから茨木に帰つてゆつくりする予定です」と母がおつしやるので、私は高槻のお寺へ入ることもなく、今度はみんなといっしょに田んぼ道を高槻から茨木へと淀川の堤防づたいに二時間ほど歩いて、帰つたのです。

田舎の人達は皆タフだなあと感じましたが、私も長野から長い時間電車にゆられ、やつとの思いで茨木のお寺に着いたと思つたら、ろくな食事もとらずすぐに高槻のお寺に向かい、それからさらに二時間歩いて茨木の家にもどつたのですから、タフでした。一二

く歳のとときです。

自分のお寺に帰り着きましたが、どの部屋も親戚の方や父の知人でうまっでいて、お寺は満員状態でした。

母の話によると、父は川向こうの檀家さんのところへ行ってお話をしている最中に机の上に倒れて、そのまま息をひきとられたそうです。お医者さん呼びに行ったらけれど、あいにく不在で、先生に診てもらうこともないままとうとう事切れたといひます。ほんとうにあっけない最期だったようです。父は立派な方でした。生前の父を思い出した時にそう思います。

父は村長をしていましたので、お葬式は村中あげて行われました。茨木から高槻の大塚というところへ、村の人たち総出で送り届けられたのです。○大塚でも告別式が行われたとのことです。皆さんにとっても惜しまれたお別れでした。

父のお葬式を無事にすませ、親戚の方々に支えられているわが家の状況を見て、私は安心しました。と同時に、できるだけ早く長野へ帰り、父や母、妹たちの面倒を見なければと思ったのです。

母や親戚の方に、夫が帰還するまで私のわがままを許してほしい旨を申しあげ、早々に長野へ帰らせていただくことにしました。

サラリーマン・エッセイの

最後の職場（格差社会の中で）

明石 幸次郎



私のサラリーマンとしての最後の職場は、今までの営業部門から工場の子会社に向かう形での転勤になり、労務管理の責任者をしていました。親会社は鋳物を製造している工場で、そこで鋳造する鋳物の部品（中子）を造って、それを一〇〇%親工場に供給している五〇人ほどの所謂下請け零細会社です。正社員と、その外に派遣社員として来ている人達が一〇人程居て、四人は日本人で、あとは、エジプト人、チュニジア人、中国人、ブラジル人、ペルー人が混じって多国籍人が働く職場でした。

この親工場も典型的な3K（きたない、きつい、厳しい）の職場で、その子会社はそれ以上に環境の悪い職場でした。3Kにプラス2A（暑い、汗臭い。夏は職場によって五〇度位になり、私なんか五分もそこにいると頭がぼーとしてきて、汗が噴出してきます）が加わるくらい大変な職場でした。そこで働いている従業員は、いい意味で個性的ですが、悪い表現すれば世間的には格差社会の落ちこぼれの弱者です。まだ、子会社の正社員は待遇面（給与）では親会社の七掛け位でましな方

でしたが、同じ仕事をしていても派遣社員はその八掛け位でした。

まあ、初めて工場を見学された方はまだ日本にもこんな工場が残っているのかと色んな意味で感心されますが、高性能エンジンには欠かせないエンジンのシリンドラーブロックを造っているため、子会社で働いている人達の心は物作りで親会社の根底を支えてやっで、親会社の現場の社員には負けないと言ふ、自負心、プライドを持っていました。それがなければ人間は生きていけない動物なんですね。

こんな子会社に向かうことは、私にとつては、当然出世コースからは完全に外れ、親工場の若手課長クラスの中には、私なんぞは会社の中ではもうお仕舞いということ、挨拶もしなくなる者もいます。人間は肩書き、会社での地位、権限、その人の将来性、会社の知名度でその人間を評価する習性があることをここにきて実感しました。

着任して間もない時期に、私が以前所属していた社内での儲け頭のエンジンを輸出している後輩が、たまたま他の用事で親工場に来たので、工場の誰かから私が子会社にいる事を聞いたので訪ねてくれました。後輩が開口一番に何気なく言った言葉は「明石さん何でこんな所にいるんですか？」でした。

これは、私に対する哀れみか同情か励ましか、又何か悪い事でもしてかしたのかと言う意味が感じられる言葉でした。それは、私の周りの人にも聞こえる位の声であったので、そこで働いている人に対する配慮のない言葉だと感じて、これに対する返事に窮しました。

この後輩は別に悪気があつて言った訳ではなく、たまたま自分は会社を動かしている事業部のしかも一番晴れやかな海外関係の部門にいるという強者の立場で、私がいるような、ちっぽけな子会社の工場を見て、私への同情があつたので、この発言になつたのでしよう。

人はついつい自分が属している立場で相手との力関係を量り、相手に対し、言葉を選んで強く出たり、弱く出たりするものですが、現場の作業長がこの発言を聞いたものですから、「あの人はどこの人ですか、明石さんとういう関係ですか、偉そうにしている人ですね。こんな所で悪かったですね！」と言外には明石さんもそう思つて自分たちを見下しているのかと言う風に厳しく当たられました。この後輩が何気なく発した言葉が、そこで汗水たらして働いている人を傷つけてしまいました。それで私もこの後輩と同じ人種だと見られてしまいました。へ



くそれから数日後、飲む機会があり、後の二次会で私が誘った職場の人達と普段は聞けない現場の人達の正直な話がありました。

この二次会には難聴のハンディキャップを持った女子と対人関係が上手くやれない問題児の男子社員も加わり、それとカラオケ好きのおばちゃん、おっちゃん達が一〇人程参加しました。

いつも、工場の汚れたトイレ、風呂掃除で汗だくになって働いているパートタイマーの六十五歳のKおばちゃんが「明石さんはいつも会う度に声を掛けてくれて嬉しいわ、元気が出るよ」と言われたので「私ら事務所の人間は現場で働いている皆さんに、ご苦労さんと声くらいしか掛けることしか出来ませんわ。Kさんが綺麗にしてくれるから気持ちよくトイレが使え、それから、使わせてもらった後、気持ちよく仕事が出来るので本当に感謝していますわ。トイレが汚かったら気持ち減入るもんで、皆、感謝してると思います」

「いや、皆は、当たり前やと思つて、誰も私らみたくないトイレ掃除のおばちゃんに声掛けてくれへんわ、特に親会社のお偉い人等は」。けど、まあ声を掛けてくれたら嬉しいもんやね。何か今日も頑張ろうと言う気持ちが出るもんや、なあ、A子ちゃん」難聴のA子は良く聞き取れなかったので、Kさん

の話の内容を確認してから「私も現場の人によく声を掛けてもらったり、今日みたいに二次会に明石さんに誘ってもらうとホンマメチャ嬉しいわ。前の親会社の職場は、私みたいな障害者は差別され、存在を無視されたような感じがありました。仕事の理解も遅いし、ちびで、顔もこんなやし、言っても分らないと相手にされず、飲みにも誘ってくれませんでした」「何でやねん、背が低い、顔がなんやと仕事と関係ないやんか？ ちゃんと教えへん周りの奴が悪いわ」と茶髪の現場若手社員B君がA子が差別されたことに憤慨して「俺も学校で成績も悪かったし、顔がキモイとか、頭もデカイので変なあだ名をつけられじめられた。それで学校に行くのが嫌になり、でも何とかいじめに負けず高校は出たわ。そんな経験があったので、絶対に人に対しては、傷つけるようなことは言わないようにしている」「B君、あんた偉いわ。ほんまやで、人は言葉で傷つけられ、勇気づけられたりするもんや。派遣の人や、外人に対しても差別したらアカンで、言葉に出さずとも態度で分るんやで。皆、頑張ってる人を傷付けるようなことは、したらあかんぞ！ 職場は明るく皆で協力して働かな、エエ品物は出来んのや！」と最長老の六十八歳のHさんが発言しました。中年のバ

ツイチSさんは「私なんか生まれた時から3Bやで、A子ちゃん気にしたらアカンで、聞こえへんかったら、相手に何遍でも聞き返したり！ チビと言われても言わせといたらエエねん。気にしたら又、面白がって言われるもんやで」長老のHさんが「おいおい、S子その3B言うて何や？」と混ぜ返すとSさんは「私らの職場はよく3Bや何やと言われるやんか。ウチはブスで貧乏でビビリの3Bやわ。貧乏は昔からやけど、あと二つのBは親からも言われてウチどれだけ子供の時分から傷ついたと思う。ウチもプライドも多少はあるやんか。ウチの子供には絶対3Bにはなってもらいたくないわ」「S子、あんたとこの、元旦那は男前やから子供も男前やろ」と。又、私の横に座っていたのが、情緒不安定の問題児のK君でした。彼は誰に言われなくても、自主的に毎朝七時前に職場に来て、仕事が始まる前に職場の掃除をして、空き缶と、ごみを分別してゴミ置き場に捨てに行っていました。「K君あんた本

「わあ嬉しい。明石さん、ホンマですか？ 何で僕が阪神ファンやと知ってるんですか？」と、「俺も色々皆の事を調べてるんやで」これに対してS子が「ウチ母子家庭で生活が大変なん明石さんも分ってる？ 分ってるんやったら時給上げて」それに対して長老のHさんが私に助け舟を出して「アンタ、不良品を出さなかったら、時給上げたるわ。なあ明石さん」。

と、うだつの上がらない我々弱者集団の飲み会はこの調子で歌と踊りと本音のしゃべりで延々十二時頃まで続きました。今、色々問題になっている、派遣社員、下請け社員、外人労働者の差別待遇の問題も、権力と権限のある人達が少しでも彼らの待遇改善へ努力する姿勢と実行、同じ目線で接する気持ちを持ち、更には本当の意味での対等意識で人間関係を作る事が、格差社会を少しでも改めることに繋がる道だと、この最後の職場で実感しました。

この私も今まで出来なかった待遇改善を私なりに致しました。因みに、この職場には一年間居ただけですが、私も弱者としての匂いを感じるのか、私が途中で会社を辞めたこともあり、この人達からは「ちゃんと生活しているの？」と言う励ましと同情と飲み会のお誘いの携帯電話を今でも頂いています。

「K君あんた本気で頑張ってる人を傷付けるようなことは、したらあかんぞ！ 職場は明るく皆で協力して働かな、エエ品物は出来んのや！」と最長老の六十八歳のHさんが発言しました。中年のバ

「わあ嬉しい。明石さん、ホンマですか？ 何で僕が阪神ファンやと知ってるんですか？」と、「俺も色々皆の事を調べてるんやで」これに対してS子が「ウチ母子家庭で生活が大変なん明石さんも分ってる？ 分ってるんやったら時給上げて」それに対して長老のHさんが私に助け舟を出して「アンタ、不良品を出さなかったら、時給上げたるわ。なあ明石さん」。

伊勢姫・能因法師ゆかりの里

福岡 努



JR高槻駅の真北に見える天神山北東の緑深い山すそには、伊勢姫ゆかりの伊勢寺が現存している。伊勢姫が晩年棲んだ庵の跡に建てられたのが、この伊勢寺（曹洞宗）であると伝えられている。

高台にあるこの寺の本堂の前庭から見下ろす景観は、見事なものである。淀川のゆたかな流れを中央にしてのまわりの平野の広がり、そして、背後の綴喜丘陵等を交えた風景は絶景といえる。現代のようなビルなどのなかった遠い昔は、今以上のすばらしい景色だったことであろう。

伊勢姫は、その生没年については未詳ではあるが、「古今集」の時代の代表的な女流歌人であり、紀貫之らと並び称されたわが国三十六歌仙の一人である。

なにはがたみじかき葦のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

伊勢（百人一首、歌番号十九）

見る人もなき山里のさくら花

ほかのちりなむのちぞさかまし

伊勢（古今和歌集）

伊勢姫は、最初は、宇多天皇の女御に仕えていたが、やがて、姫自身が御

息所となり、天皇の寵愛を受け、行親親王をもうけるが、その皇子が八歳で夭折するという。思いもかけない不幸に見まわれる。その後、宇多天皇も皇位を退き出家してしまい、やがて、九

三一年に逝去してしまふ。ひとりとり残された伊勢姫は、怪しい気持ちから、そのまま生きていくことはとても出来ない、京都を離れてしまうことになる。あちこちを彷徨った後、辿り着いたところが、どのようなえにし（縁）によるものであろうか。この高槻の①の里であった。

本堂の西側には、伊勢姫を祀っている廟堂があり、そのかたわらに、亀石の台座にのった立派な廟碑がある。これを建立したのは、江戸時代の高槻城の城主②である。碑文は、幕府の儒学者林羅山によって書かれたものである。

②はその前年にも、すぐそばにある能因塚に、能因法師の顕彰碑を建立している。碑文は、伊勢姫の場合と同様、林羅山によるもので、能因の事跡が刻まれている。

歌人能因法師は、九八八年生まれで伊勢姫よりもずっと後の人である。九世紀生まれの伊勢姫の歌・作風・人柄を慕って伊勢寺を訪ねて来、①の里に居を構えて歌道に専念。この地を、あらしふく三室の山のもみじ葉は

竜田のかはの錦なりけり

能因法師（百人一首、歌番号六十九）

山里の春の夕暮きてみれば入相の鏡に花ぞちりける

能因法師（新古今和歌集）

伊勢姫の顕彰碑が建立されたのは、一六五一年、伊勢姫が亡くなって七百年も経ってからのことである。以後、①の里一帯は、伊勢姫・能因法師ゆかりの地として広く世に知られるようになったという。

右の文章の中の①と②に当てはまる言葉それぞれア・イ・ウの中から選んで下さい。

問1▼①に当てはまることは

ア、芥川。イ、玉川。ウ、古曾部。

問2▼②に当てはまることは

ア、高山右近。イ、三好長慶。ウ、永井直清。

携帯エッセイ▼7



「惚け」

母が死んだ。九十四歳だった。

亡くなる六年前ぐらいから惚けが始まった。まず、財布を隠すものだから、自分でどこに置いたか分からなくなつた。そのうち、泥棒が入って、お金を取って行った、と言い出した。一人暮らしの不安感の為だろう。被害妄想に陥った。

次いで、どこを歩いているのか、分からなくなつた。近所の人が家まで連れて来てくれた。さらに鍵が開けられなくなった。少し引つかかっていただけに、閉じ込められたと思つたらしい。夜中に大声で叫んだので向かいの人が警察に連絡した。警官が窓から入ってなだめてくれた。

もはや一人暮らしは無理だった。兄が遠くの老人ホームを捜してきた。しかし、母は嫌がった。馴染みのある近くの老人ホームなら入っても良いと言ふ。しかし、その老人ホームに入るには三百人待ちだという。「やむを得ない。いつ入れるか分からんが、頑張ってみよう」と兄に言った。

そうして介護を始めた。お金は私が管理し、毎週、母宅に通うことにした。金曜日に会社が終わってから母宅を訪ね、夕食を一緒にし、その晩は泊まつた。翌日の土曜日には医者や銀行に連れていったり、一週間分の食料の買い出しをして、夕食を済ませてから帰宅した。

そのうち母の惚けは治つた。ど忘れはあるが、妄想は言わなくなった。介護は三年間、続けた。その経験は、いま私の大きな財産になつている。

(龍)

貴方の心のつばやきをお送り下さい 一八〇～二五〇文字位で



# 脳障害

汚染される環境と人体⑧

山彦海彦



化学物質過敏症を引き起こす最悪の物質は、春から夏にかけて散布される農薬の「有機リン」です。

自然抗原で脳に反応を起こしやすいものは「黴」です。五月二六日に出雲大社の松枯れを防除するために有機リン農薬「スミバインMC」がヘリコプターで散布され、通学途上の学童一〇〇人以上にシックハウス症候群の症状が出ました。また、ヨーロッパでは疫学調査で黴の多い住居では鬱病が多いことが報告されています。

精神科医の間では患者の病気に季節性があることに多くの医師が気付いています。農薬が散布される時期と脳アレルギー患者の増加が重なるのです。その因果関係が明らかにされつつあります。

子どもの攻撃性が増進するのも「脳アレルギー」症状の一つです。攻撃性の高まりは犯罪の誘因となります。ところが、この脳アレルギーの攻撃性増進という症状は認知されていない。『複合汚染』のなかで梁瀬義亮医師が訴えた有機リン農薬のもつ、脳神経に深刻な障害をもたらす慢性毒性は未だに無

視されているのです。

有機リン農薬の問題とは異なりますが、犯罪と医療の現場から子供の脳の不気味な変化に気付いておられるのが上智大学教授で精神科医、福島章氏です。化学物質過敏症治療の第一人者、群馬県前橋市の青山美子医師から僕に直接ご紹介いただいた研究です。

仕事柄福島氏は長年少年犯罪者の精神鑑定に携わってきました。あの神戸の少年Aも鑑定されています。そして重大殺人を犯した少年達の脳をCTスキャンで調べてみたところ、六割以上に脳の発達欠損が見られました。福島氏は胎児期の発達段階において何らかの化学物質によって「環境ホルモン」の影響を受けたからではないかと推測されています。氏の著書『子どもの脳が危ない』（PHP新書）で詳しく述べられています。脳の欠損が性格異常や行動異常を誘発している可能性があるのです。

我々は自分たちの手で有害金属や化学物質で環境を汚染し、胎児の脳に異常を作り、ひいては子どもたちに犯罪を起こさせている可能性があります。最大の被害者は子ども達で、環境や人体を汚染しそれを許している我々こそが加害者なのです。

福島氏の『子どもの脳が危ない』では、メキシコに於ける農薬多用地区と

そうでない地区の子供の描画が紹介されています。多用地区の幼い子が描いた絵は異常なのです。

犯罪の現場からもう一人の方が警鐘を鳴らされています。その方は岩手大学名誉教授で犯罪心理学を専攻されていた大沢博氏です。氏は長年少年犯罪者のカウンセリングに取り組んでこられた方です。氏は、そのような子供達の多くが両親不在のひとりぼっちの「孤食」状態で、甘いコーラやジュースを飲み、いわゆるジャンクフードばかり食べていることに気付きました。そのことから導き出されたのが「低血糖症」でした……。

おい、カラスよ \*\*\*リレーイヤイ\*\*\* 「おい、カラスよ」で始まるイヤイを募集します

「おーい、カラスよ」

賢そうな眼差し、強そうな意志、何を考えているのだろうか

何にも染まらず、頑固に自分を生きているだけなのか

うらやましいよ

分けてくれないか

何もかも覆い隠す、魔法の黒いペールを…

## 女優・松井須磨子(4)

『山猿の介護日誌』⑩

傲慢なほど一直線であった彼女の熱情—あの人の生き力は、前にあるものを押破つて、バリバリとやつていく、冷静な学者の魂に生々しい熱い血潮をそそぎかけ、冷凍していた五臓に若々しい血を湧返らせ、絶えず傍らから烈しい火を燃やしつづけた。彼女は掌握しめてしまわなければ安心することの出来ない人であった。そうするには見栄も嘲笑も意にしなかった。そのためには抱月氏がどんな困難な立場であろうとかまわなかった。彼女の性質は燃えさかる火である、むかつ気である。

劇作家、長谷川時雨は須磨子の激しさをこのように語っている。

抱月という優れた才能と深い愛情を得て、燃えさかる火のような「生き力」で女優の絶頂を迎えていた須磨子に、暗い影が忍びよっていた。

大正七年十月、芸術倶楽部で五日間行われた、有島武郎の「死とその前後」を演目とする研究劇が終わって間もなく、座員たちが感冒にかかった。当時世界中ではやり、日本でも四五万の犠牲者をだしたスペイン・インフルエンザである。須磨子も感染し、高热で、

床についた。

はじめは須磨子を介抱していた抱月も高熱を出し寝込んでしまう。須磨子は思いのほか早く治ったが、抱月は熱が下がらなかった。十一月になって、医師に診てもらおうがいつころによくならない。

十一月は、明治座で行われる歌舞伎興行の中幕にダヌンチオの「緑の朝」を上演することになっていた。演出は抱月ではなく小山内薫であった。須磨子はイザベルという大役を演ずることになっていた。

回復した須磨子は明治座へ舞台けいこに毎日出かけていた。十一月四日午後、けいこに行くのをためらうようにぐずぐずしている須磨子を「早く行きなさい。しっかりけいこをしてくるのだ」と抱月は励ました。須磨子には抱月がそれほど苦しそうには見えなかった。書生やお手伝いに、くどいくらいにあとのことをたのんで、明治座に向かった。途中、何度も引き換えそうと思ったが、そうすれば抱月に叱られるにきままっている。これが最後の別れとなった。

須磨子は何度も芸術倶楽部に電話をして、様子を聞いていた。夕方六時ごろ抱月が苦しはじめ、医者と呼ばれた。医者は「肺炎になっていて」という。雑用係の男が明治座に電話をかけ、

「先生がお悪いようです」と須磨子に報告すると、「なるべく早く帰る」と、まわりが驚くほどの大声で叫んだ。けいこは夜中におよび、終わったのは翌日の午前二時だった。

須磨子は急いで衣装やかつらを脱いで、楽屋口に待たせておいた車に乗り込んで芸術倶楽部へ向かった。三〇分ほどで着くと、須磨子はすすり泣きながら二階に駆けあがる。抱月の顔には白い布がかけられ、体は冷たくなっていた。

「ひどいわ、ひどいわ、だれも教えてくれないんですもの」と須磨子は泣きながらいう。抱月の遺体を抱いたり、なでさすったり、「どうしよう、どうしよう」と遺体のまわりをまわったりした。医者に「どうにかありませんか。もう一度注射をしてください。これではあまりに残酷です。なんとかしてください」と叫び、抱月の体に顔を押しつけ、慟哭しつづけた。

抱月は亡くなる前にしきりに水を求め、明治座に電話するようにいった。その電話は、須磨子がけいこに入る直前であり、知らされていなかった。抱月は最後に「俺は危篤なんだよ」といったという。須磨子がけいこを終えたころ、抱月は息をひきとった。五日の夜が明けた。須磨子は一睡もせず、抱月のそばにすわっていた。や



須磨子(左)と抱月(右)。中央は中村吉蔵(須磨子芸術倶楽部)

がて抱月の家族がおとずれる。須磨子は遺族の前で手をついて、「私がゆき届きませんで、申し訳ないことをしました。私も先生のご臨終にはとうとう会えませんでした。残念で残念でたまりません」と頭を下げた。遺族は黙ったままだった。

「先生のお葬式はできるだけ立派にさせてください。どんなに費用がかかっても、かまいません。それだけは私にさせてください」と須磨子が申し出ると、妻の市子は須磨子のほうを見て、静かにうなずいた。

抱月の死の翌日、須磨子は明治座の舞台に立った。「緑の朝」の序幕があいて、イザベル扮する須磨子があらわれると、満場の喝采が起こった。須磨子は涙を抑えることができなかった。恋人の死に

慟哭するイザベルを演じる須磨子は「凄美だった」と長谷川時雨は評している。

須磨子の感情の波はますます荒なつた。ヒステリックに大声で怒ったり、まわりの座員があきれるくらいに大笑いしたりした。抱月死後は泣くということが増えた。

芸術座は、抱月の遺志を継いで解散せず、須磨子が座主となつてつづけていくことになる。年明けには、有楽座で行われる「肉店」(中村吉蔵)と「カルメン」(メルメ)の公演が控えていた。カルメンは気の強いジプシーの女で、須磨子の適役であったが、けいこ場では芝居のいきが弱かったという。「カルメン」が須磨子最後の舞台となる。



M蔵の足もとから雪面が琵琶湖側に切れ落ちている。雪庇が崩壊したのだ。Y太の姿が見あたらない。二人はザックを投げ出すと同時に、東斜面に飛び降りた。勢いで腰まで雪に沈んだ不安定な態勢をすぐさま立て直し、デブリを除きながらY太の痕跡を探す。なかなか見つからない。焦りがつのる。時間が無情に過ぎてゆく。時の刻みを止めることはできないものか……。

「いた!」。ついにM蔵が見つけた。探しあてた赤いヤッケをたぐるように周りの雪を取り除き、Y太を掘り起こす。すると、自らも力強くはい出てきた。雪庇に埋まったときは、何が起こったのか認識できず茫然自失の状態であったようだが、いまは正気を取りもどしている。けがもないようだ。顔色もいい。Y太の無事を確認して稜線に戻った。

安堵する間も惜しんで、われわれは歩きはじめた。Y太の足運びからみて、後遺症はないようだ。ピークはすぐそこだ。一步一步近づいてゆく。

十一時二十分、ついに堂満岳の絶頂にいたった。三人は言葉を交わさず、互いに見つめ合う。喜びをこらえるようにたたくむY太の姿を見て、M蔵は目頭が熱くなる。なぜか、だれも登頂の興奮を表に出そうとはしなかった。

突然、あたりがすーっと明るくなり、

暖かい日差しに包まれたと思つた瞬間、刺すような冷気がM蔵を貫いた。そのただならぬ冷気に神の目くばせのような霊気を感じたM蔵は、驚いたように東に振り向く。

すると、切れ切れの雲の間から豊かな水をたたえる琵琶湖が姿を見せはじめたではないか。そして、瞬く間に紺青の全貌をあらわした。足下に広がる景観に三人の魂は揺さぶられる。

視線を落とすと、弁財天を祀る竹生島が浮かんでいる。織田信長が、神になるという野望を実現するために安土城の徳見寺に勧進安置した、たいへんご利益のある弁天様である。琵琶湖を挟んで堂満岳と対峙するように鎮座するのは、役行者が開いたと伝えられる古來からの信仰の山、伊吹山である。伊吹山には、山の気象をつかさどる荒ぶる神が住み給う。ヤマトタケルが討ちとろうとしたその山神は、大蛇とも白猪とも記紀に語られる。はるか南を見やると、あの比叡の山が雲の上に浮かんでいる。白く光っているのは根本中堂だろうか。

その麓の湖畔に目をこらすと、鎮満上人入滅の地が霞んで見えた。あそこにネオンが灯った夜景はみごとだろうな、と山猿が俗物的な想像をめぐらしたとき、一瞬にしてガスにつつまれ、視界は閉じられた。

いま目の当たりにした風景は現か、幻か。あれは、われわれの堂満岳登頂を祝して、弁天様がもたらしたご利益だったのか、それとも伊吹の荒ぶる山神のはか

らいだったのだろうか。ほんの数秒とはいえ、水の国、淡海をたしかに一望したのだ。

われわれの堂満岳登頂というドラマは終わった。ピークを去るときがきたのだ。大きな目標を果たしたわれわれの心は清々しい。足どりも軽やかに下りてゆく。この満ち足りた気持ちに誰かに伝えたい、と山猿が思つたとき、携帯電話の着信音が鳴った。こんな山の中で通信ができるのは便利になったものだ。とはいえ、山の中で電話をするということに、何かどうしようもない居心地の悪さをぬぐい去ることはできない。胸ポケットから取り出すのにとまどっているうちに、切れてしまう。

ヨシからだ。彼もわれわれの堂満登頂を直感し、それを祝福するために、いても立ってもいられず電話をしてきたのだろう。同じ山屋としてうれしいではないか。登頂の喜びを分かち合いたい。山猿はヨシにコールバックする。五回ほど呼び出し音が鳴ってヨシの声が耳に飛び込んできた。ところが……。

「堂満岳に行つたんだらう、ルートまちがえて。へ、へ、俺たちはいま南比良峠だもんねえ。クソもしたし、焼酎で一杯やっているとところだ。ガア、ハ、ハ、ハ……、はよー来い」とぬかしおつた。

山猿は「バ、バ、バカー……! おまえは、堂満岳登頂というクライマックスを経験したばかりの俺たちの感動を汲み取れないのか。ましてこの霊峰、堂満

岳の懐でウンコたれるとは何ごとか、この罰当たりめがー。クソなら金糞でせい。そのうえ、一杯やっていると、愚かものめー」と胸の奥で叫び、堂満の頂きに向かつて「山の神よ、この罪深きものを許したまえ」とひたすら祈るのであつた。そう祈りながらも、「焼酎で一杯」がうらやましい山猿でもあつた。

登頂の満足感と、その感動をわかつてもらえぬ虚しさに引き裂かれた三人は、「アホらし、金糞から下りようか」などといいなながらも、みな待つ南比良峠に向かった。

下りはじめてしばらくすると、女性二人が登ってきた。脇にそれてルートをやすり、通りすぎるのを待つ。

ピンクのヤッケに身を包んだ先頭の女性には、ハスキーな声でとぎれることなく話しつづけ、ときおり後ろの女性に振り向いて無邪気に笑いかける。ヤッケをとおして透けるスリムな姿態に、M蔵と山猿は眼をむせらせる。その抱きしめたくなくような不思議な色気に、M蔵の胸の中で何かが泡立った。山猿は愛欲の渦に足をとられ、次第に理性がはぎ取られていく。

そして、つぎに続く女性を見て、M蔵と山猿の欲情は一気に臨界点に達してしまふ。彼女の嬌やかな容姿が二人の情炎に油を注いでしまったのだ。

女性はほんのわずかだけ口元に笑みを浮かべ、軽く会釈をして通りすぎた。歳の頃は三十路半ば、潤みを帯びた大きな瞳、透きとおる白い肌、柔らかな物腰、

全身に漂う、匂い立つような色香にM蔵と山猿はめまいを覚える。山猿はそのまま、残り香に引きずられるように、女性の後を追いかけてい

衝動に駆られる。「いかん、ここはあの鎮満上人の修行した山だ」、そう思いながらも、女性が発散する色香の誘惑にあらがうことはできない。

そのとき山猿は、あまたの遊蕩(ゆうどう)を重ねこれからも重ねてゆくであろう己の中に、ヨシに劣らぬ罪深さを自覚するのであった。一生、煩惱の束縛から逃れることはできないのだろうか。堂満岳登頂を機に、この身に積もり積もった罪障をそそがねばなるまい……。

南比良峠で全員がそろったのは、感動の堂満岳登頂から三十分後である。金糞峠で別れてからわずか一時間のあいだではあるが、あのドラマチックな登頂を経験したものとしなかったものとの溝は深い。

ヨシはほろ酔い機嫌で笑いながら、「ルートまちがえたんやろ」と揶揄する。それにたいしてM蔵は「ここまできて、堂満に登らないやつはアホや。山屋とちやう」とかえす。どちらもゆずらない。

そのとき山猿は思い立った。——ようし、ならば、われわれの堂満岳登頂がいかに意味のある登山であったか、どれほどすばらしい登山であったかということ物語にしてやろう、感動の物語を語ってやろうじやないか。

## 驚き

立木 理



ハッと驚いたことがこれまでに二回ある。その二つの驚きを越えるものにもまだ巡り会っていない。

その一つが、富士山。初めて見たのは中学生の修学旅行だった。車窓のガラス越しにとんでもなく大きな物体が目飛び込んできた。その日は雨で灰色の塊だった、その大きさに唖然とし、一瞬の驚きとして滑り込んで来た。その瞬間に何もかが刻印されたようである。上手く語れないが、四十年を過ぎてなおその瞬間の驚きが鮮明に残っている。

富士山を見て気分を悪くする人は誰一人いないだろう。「晴れてよし、曇りてよし、富士の山」であろうが、私にはいつまで経っても形容の言葉なき「驚き」の対象である。

気持が沈むと富士山を見たくなくなる。十年も前になろうか、ゆっくり富士山を眺め、伊豆の修善寺に一泊しようとして一人出掛けた。三島で新幹線を下りるなり手当たり次第に電話をするが、秋の観光時期で何処も承諾してくれない。初めは空があると云いながらも、一人と言うと悉く断られる。公衆電話を二十分余り占拠していたが諦める

ほかなく、その日は駅前のビジネスホテルとなった。

富士山が良く見える場所を観光案内所で尋ねると、伊豆長岡温泉近くの〇〇展望台に行けばよいと教えられ、翌朝向かうことにした。

団体客の多い日だった。ロープウェイで山頂まで運んでくれる。秋晴れのもと、雪を程よくかぶった、澄んだ色合いの富士山の全景が、有無を言わさぬ姿でそこに広がっている。その富士もまた思わず「うっ」と言葉を漏らしてしまう瞬間を与えてくれた。遮るものは何もなく、まるで空中に描かれた絵を見ているような感覚さえあった。語りかける相手もおらず、ただ眺め過ぐすこと数時間。その前と後に私に何かの変化があったとも思えないが、ただ無為に富士山と対峙したことこの満足感をもって麓へ降りた。

翌日仕事関係で仲良くなった方に「伊豆へ行ったが何処も泊めてくれなかった」と話すと、「今時一人で行けば自殺するのではないかと思われよ」と言う。確かに、バブル崩壊後の資産価値の下落、業績不振、また銀行の貸し渋りや貸し剥がしなどの言葉が生まれた時期で、命を絶つ人が増えた頃だった。また、小さな菓子箱を土産に渡したおり、部下の一人が、「富士山で良かったですよ、東尋坊でなくて。」と笑いながら言葉を

返して来てくれた。私は、余程悲壮感を漂わせて仕事をしていたのだろう。そこまで落込んではいなかったのだが、傍目には良くは映っていなかったようだ。

その時、私は富士山によって多少ともバランスを取り戻したかもしれない。もちろん美しくなることはなかったが、

他の人からすれば何でもないものが、自分には素晴らしく見えたり、大切に思えたり、そんな体験を誰もがしているはずだ。感じることに、驚くこと、これこそが生きていることの証であり、値打ちと思う。人やものが発する

無形のものに反応する心を失ってはならない。時に嫌悪の反応となることもあるが、望むらくは気持の良い反応でありたい。他の人は感じないであろうものを、他の人には見えないであろうものを、感得するところに個々の違いの価値がある。

驚きは、瞬時に無条件に突き刺さって来る。予想も想像も期待も無いところに突然表れる。だから驚きであるが、それは心奥に潜在するものが感応することでもある。人みな気付かない自分を内に持っている。潜在するものを引出せば、その数だけ味わいある人生が歩めそうにも思われる。

そして大人に成ってから、もう一つの「驚き」をもたらして呉れた方が居た。今は遠くその人の幸せを願っている。



夏山合宿

梵店主



新人を何とか五人ほど部につなぎとめて、夏の合宿を立山・剣岳で行なった。

よっちゃんは二年だが、剣岳に行ったことがない。そんなよっちゃんが、新人を指導して雪渓を登り、岩壁を登らなくては行けない。体力的に強いだけでは出来ない。上級生が少ないからリーダーとして登らなければいけない計画も一部ある。よっちゃんが一年の新人を全面的に面倒見なければならぬのだ。これは大変なことであるが、そのときには妙に不安よりも自信があったのである。それは、大雪の吹雪の中歩き続けたことや、明神岳を楽々と登ってきたことからくるものであった。とにかく荷物を担ぐことにかけては誰にも負けないと言う自信であった。山登りは体力が基本である。

七月の終わり頃、太陽が照り輝く雷鳥沢を大きなザックを担いだ十人が、合宿の基地にする真砂沢を目指して登った。幸か不幸か、立山・室堂でNHKの富山放送局のスタッフに取材同行を申し込まれて、断る理由も無いから同意したために、四人のスタッフが二台のビデオカメラを動かしながらついてくる。最初のピ

ツチは何とか隊をなしたが、次から行って行けなかった。一年でついて行けなくなると出てくるのである。こうなると大変なのである、よっちゃんは一年の後ろにつき叱咤激励の「もう少しだ、がんばれ！」を幾度と無く繰り返すことにな。例え先がどんなに遠くても「もうちょっとだ、がんばろう！」を言い続けるのである。

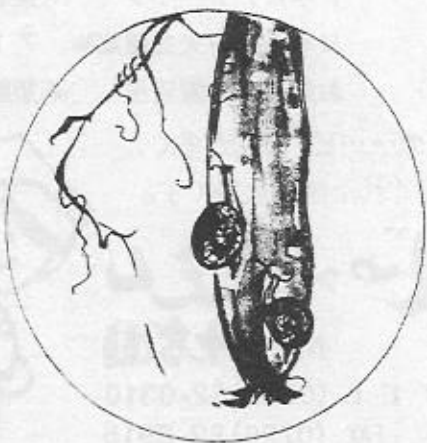
しかし、山は甘くない。疲れてきた一年が歩いているうちは、遅くても、フラフラしながらでも前に進んでいるときは、我慢しながら後をついていく。六十キロのザックは初めての一年にとっては大変なのである。よっちゃんは、自分の経験から今年からは一年にはあまり重い荷は担がせないようにした。代わって二年が一番重い荷を担ぐことにしたのである。よっちゃんの荷は七十キロである。だから、ゆっくり歩かれたらよっちゃんも大変苦しいのである。しかし、上級生だから辛抱しなければならぬ。

とうとう、一年が歩くのを止めた。無造作にしゃがみこむ。仰向けにザックを背負ったまま倒れる。泣きながら「おかあちゃん、」と泣き出す。先を歩いている部員は剣御前を目指しているが、少し遅れているのもある。上級生が少なく一年が多いと面倒を見切れない。よっちゃんは、歩けなくなった一年に向かって「バカ、どうするんや、すっかりせい」といいか、歩く調子も良くなってきた。

泣くとも、わめくとも言えない様な表情で「蝶々が、蝶々が…」と言いつつ出た。大変なのである、よっちゃんは、自分の荷を肩から下ろしてやり、少し休ませることにした。一般の登山者の女性が近づいてきて「やめて下さい。そんなきついこと、大きな荷物を担がせて…」とよっちゃんに言う。「いや、これは山岳部の訓練ですから…」と言うのが精一杯で、よっちゃんの頭は「どうしようか？」「こいつは、行けるだろうか」の判断に迫られた。この間も、つきつきりで「ジ」という音をさせながら、テレビカメラは廻り続けている。

よっちゃんは、九十キロ近い荷を持つている訳だから、ついて登るが大変であるが、何とかみんなの待つ剣御前の小屋に着いた。あとは下りだからマシだ、魔の雷鳥沢のボツカは乗り越えられた。そう思うと、何とはなしに充実感が沸いてくるのである。

テレビカメラのスタッフともここで別れである、お礼にジュースの缶をみんなにくれた。五時間ほどの取材であった。このビデオは後日「黒部の四季」として富山放送局のローカル版として放映されたそうであるが、よっちゃん達は見えないから、どんな映像になったかは知らない。



挿し絵を担当して

平木清栄

雨後のみどりの美しい昨今、「芥川だより」の挿し絵を卒業させて頂く事になりました。

すぐ浮かび描ける時も、又どの様に表現してよいかわからない時といろいろ有りましたが、学ぶ事多い楽しい年月でした。二十四回を目指して頑張つて参りました。

皆様に感謝致し御礼申し上げます。書中をもちまして御挨拶申し上げます。

これからは、愛読者として応援申し上げます。

かしこ



編集後記

挿し絵を描いていただいている平木清栄さんが創刊号を出してまもない頃に来店された時、挿し絵のボランティアを依頼しましたところ、快く引き受けて二年間描くことを約束していただいていたから、早いもので二年が経ちました。ほんとうに長い間ありがとうございました。

今回、当初の目標の二十四号を出す事が出来ました。とてもこんなに長く続くとはいっていませんでしたが、皆さんのご支援で続ける事ができました。

ささやかなミニコミ誌ですが、応援していただいている方々からの声に後押しされ続けてみようかと欲も出ています。これまでは自己負担やカンパでやってまいりましたが、二十五号からは、編集スタイルを少し変え、平木さんの忠告「金儲けを考えたらあかんで！」を守りながら続けられる迄続けたいと思っています。新しい「芥川だより」も楽しんでいただけたらと思います。よろしくお願い致します

新「芥川だより」

発行日：毎月一日

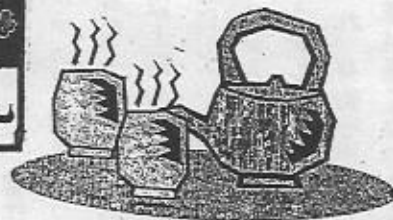
コピー代の負担をお願いします

A3両面刷り1枚で二十円

(2枚になると四十円です)

二十五号は九月一日発行予定

お茶の友、お酒の友、  
ご進物に好適品



お茶をのむ

ごはんの前だと  
お茶をのみ

ごはんがすんだと  
お茶をのみ

いつてくるよと  
お茶をのみ

帰ってきたよと  
お茶をのみ

そろそろやるかと  
お茶をのみ

いちだんらくで  
お茶をのみ

もう少しやろうと  
お茶をのみ

ようやくすんだと  
お茶にする

だれもこないと  
お茶をのみ

だれか来たよと  
お茶になる

いつでもなんでも  
お茶をのみ

なんにもないので  
お茶をのみ

こころほのぼの  
お茶をのみ

摂津峡漬®はお茶請けに最適です

日本茶アドバイザー 奥谷晶男  
日本茶業中央会認定No. ア1-0186  
お茶の十方園店主 茶業歴 40年

お茶は自然のまゝの お飲みもの……ビタミンCが多く  
強アルカリ性で、カロリーゼロのすぐれた健康飲料です。

茶 Tea is Best!!  
やっぱりお茶 専門店

じゃっぽえん  
お茶の十方園



T569-1123

T E L (0726) 82-0310

高槻市芥川町1丁目13-12

FAX (0726) 82-6915

営業時間 AM 10:00~PM 6:00

定休日:日曜 祝日

